



第 7 号

発 行 者
会 津 能 楽 会
責 任 者
佐 藤 ヨシカ
〒965-0856
会津若松市幕内東町2-11
電話0242(26)1003

定期演能会について考える

会 長 佐 藤 ヨシカ

新たな年を迎えた皆様に、二十六年、二十七年の活動記録を載せた会報第七号をお届けすることができました。会員の皆様のご協力により「狸々」を最後に二年間の行事が無事に終了できましたこと誠に感謝申し上げます。

さて、今年度の行事計画は企画委員会で討議されまが、立方の不足がいつも問題になります。お役の辞退理由には、さまざまございますが、代わりの方にお願いをするのには事務局は大変苦労しております。

夢の会津能楽堂ができてはや六年。年三回の演能のうち新能はほぼ満席となりますが、春、秋の演能会では満足のお客席とはとても言えません。残念であります。

そこで、会津の定期演能会がより多くの市民に親しまれるための方策をいくつか述べてみたいと思います。

その一、宣伝が足りないことです。会津管内へのポスターや番組の配布はかなり広範囲に行っていますが、その反応、効果の有無はわかりません。今後は新聞社や地元FM放送局へ会員が訪問してPRをするなどの

活動がいかかと思えます。また、他県の能楽団体や大学サークルへのポスターや番組の郵送なども考えられます。

その二、能についての解説を演能の前に必ずおこなう、「能は難しい。何を言っているかわからない」という感想を少しでも減らすようにしたいと思います。これ

がリピーターを生み出すキッカケになると思います。その三、技能の向上は各人の努力にゆだねられておりますが、私たちはお互いに素人同志ですので、指摘した

ことがあっても、言い難いため、黙ってしまいます。そのために自己流が定着してしまう原因になります。それを防ぐため能楽師の指導を受ける機会を作りたいと思います。たとえば、申し合わせの時に能楽師から全員で指導を受けるなどは検討に値すると思います。

その四、能楽堂建設十年目、すなわち平成三十年には会津能楽堂でプロによる演能会を計画し、停滞気味の会津能楽に刺激を与えたいかと思えます。

以上、いろいろと思いつくままに私見を述べ皆様に関心を提起いたしました。総会を待たずともご意見をお聞かせいただければ幸いです。

- ② ③ 演能の記録 (26年度)
- ④ ⑤ 演能の記録 (27年度)
- ⑥ グループ紹介 (第 2 回)
- ⑦ 能のひびき (随想他)
- ⑧ ⑨ 根ざし行く育成委員会活動
- ⑩ 顧問山田和彦先生二つの
功労賞に輝く
寄稿 私と能文化
ニサ・シャノン
- ⑪ ホームページについて・その他
- ⑫ 役員名簿・その他情報
編集後記



増女 会津能楽会所蔵

小面より年長の女性で、多少憂いと品性がある。天女や神女にも用いられる。近年では二十四年秋の「葛城」の後シテ、二十六年秋「班女」で用いた。花筐、江口、巴などでも用いられる。

演能の記録

—平成二十六年—二十七年

平成二十六年

春の演能

五月二十五日(日)
会津能楽堂



後見 佐藤 仁 平林 光雄
坂内 實 皆川 米作
昇 上野 正義

能初舞台を踏んで

二瓶 晃

仕舞もやったことがない私が、能「忠度」のワキヅレのお役をいただき、初舞台を踏んだ。誰にでも「初め」はあるだろうけど、無本で謡う、仕舞の姿勢、足を運ぶということ、ロボットのように体の動きもぎこちなく、覚えの悪い私には、その日か



ら冷や汗びつしよりの悪夢のような日々が続いた。佐藤ヨシカ先生には、何もかも初めから全て、しっかりと御指導いただきました。また、ワキ役の荒川勝さんには細かい点まで教えていただき感謝しております。でも、私自身なかなか覚えることが出来ず、無理かなと何度も思いました。でも、以前から「能」を観賞してきて、私も一度はやってみたいという思いがありました。今まで「素謡」しかやってこなかった私には、遠い夢の世界でした。会津能楽会に入会し、いつも遠くから観せていただいていた会員の皆様と一緒に、今、こうして舞台に立てたのだ。思いが実現し、感謝の気持ちで一杯になりました。今までに味わえなかった能ならではの喜び、達成感、生涯の思い出になるでしょう。この経験を生かし、この世界の素晴らしさ、楽しさを味わっていききたい。そして古典芸能の魅力、少しでも理解し、新しい仲間が増えることを祈っています。

第二十八回 会津鶴ヶ城新能

九月二十三日(祝・火)
会津能楽堂

「須磨源氏」

能「須磨源氏」に出演して

上野 正義

いつもの事であるが、覚え込むまには相当時間がかかる。よく「百回謡えば覚えられる」と言うが、私はそれでも足りないような気がする。本番を迎えるころは風邪にかかった時のような喉の状態になる。本番中に咳が出ないか心配になる。終われば自然と治ってくる。

舞台での心がけとしてはつきり謡うこと、動作がせかせかにならないようにしているつもりである。見所の評価は当然わからない。須磨源氏はワキが謡う長さは普通と思うが、掛け合いがあるのでシテのところも覚えると、結構な長さとなった。道行のところではひと動作抜けてしまったが、後で見ている人に聞いたら、分からなかったとの事から一安心した。ワキ役は下二居の姿勢が長く続き苦痛と忍耐を伴うものであるが、今回はそれをあまり感じなかった。ワキヅレは早くから下二居の姿勢でいたから、大変だったと思う。演能が認知され始めているこの頃なので、見所では素人の演能などとは思わず、辛口の批評が聞こえてくる場合がある。舞台では何が起るか誰もわからない。自分の失敗はわかるので終演後反省しきりである。

秋の演能

十月二十五日(土)
会津能楽堂

「班女(半能)」

後シテ 栗城 幸子
ワキ 佐藤 仁
ワキヅレ 皆川 米作

囃子 大 鼓 坂内 庄一
小 鼓 折笠 成美
笛 山田 和彦

地謡 宇田 宣子 大塚 利衛
渡部 静子 佐藤ヨシカ
山垣美枝子 玉川おくに
遠藤ヒロ子 星 茂登美

能「班女」ワキを演じて

佐藤 仁

二〇一四年初、思い起こせば辛い秋だった。
九月十五日 劇団きらく座公演
「志の肥ゆるを」三浦六郎役
十月二十五日 秋の演能会
能「班女」ワキ
十一月二日 「自由民権運動加波山事件百三十周年記念シンポジウ

ム」事務局…。
気持ちの休まる時がなかった。明け方訪れるレム睡眠時、これらのことが一挙に脳裏に浮かんで眠りが消えて行く。「班女」ワキの詞章と「志の肥ゆるを」六郎の台詞を脳中で繰り返し、眠りの再来を待つという日々の連続だった。

「班女」の稽古は八月二十七日から始まった。二回の申し合わせを含めて十一回の稽古だった。所作は詞章とともに身につく。その詞章が稽古の回数を重ねるに連れて緊張感がほぐれるせい、却って間違うという現象を味わった。

十月二十五日、当日は快適に晴れた。二時十分開演。橋懸をすり足で辿りながら気分は白河の関から美濃へと立ち帰る旅人の気分。やがて「急ぐ間これは早美濃の国野上の宿に着きて候」と謡うべきところにさしかかったが、「急ぐ間これは早」が出てこない。しばし言い淀んでいると、すかさず地頭ヨシカ先生の声が「これは早く」と聞こえてきた。その声に助けられて以後は滞りなく流れた。後シテ栗城先生の班女の舞は圧巻だった。互いに扇を取り交わして変わらぬ愛を誓いあつて物語は終わった。辛い公演ではあったが、達成感が残った。

前シテ 鈴木 圭介
後シテ 平山 昇
ワキ 上野 正義
ワキヅレ 斎藤 堅
大 鼓 船木 真一
小 鼓 折笠 成美
太 鼓 一条 正夫
笛 山田 和彦

地謡 荒川 勝 皆川 米作
相田 幸三 中村 寿男
鈴木 直寿 佐藤 信英
後見 佐藤 仁 松尾 幸生



平成二十七年

春の演能

五月三十一日(日)
会津能楽堂

【羽衣】

シ テ 秋本 征子
ワ キ 松尾 幸生
ワ キ ヅ レ 長澤 豊

囃子 大 鼓 平山 昇
小 鼓 川上 茂樹
太 鼓 一条 正夫
笛 野崎 邦子



地謡 森田ルリ子 古田 豊子
渡部 静子 栗城 幸子
山垣美枝子 遠藤ヒロ子
増井 典子 渡辺ヒロ子

後見 佐藤ヨシカ 堀 篤子



お能羽衣を終えて

秋本 征子

思いがけず、お能「羽衣」のお話をいただきました。時にはとまどいながらも受けはしたものの、不安でいっぱいでした。

頑張つてやらせていただきました。とお思ってお稽古に入りました。「序の舞」はしばらくは舞っていませんので、前に舞った時のテープを見て思い出しながら稽古し、詞も覚え動きも方向が見えて来ました。話の下手なのが禍し一向に思うようにならずお引き受けしたことを後悔しましたが後の

第二十九回
会津鶴ヶ城新能

九月二十三日(祝・水)

会津能楽堂

【土蜘蛛】

前シテ 平山 昇
後シテ 一条 正夫
頼 光 洪川 兼三



従 者 馬場 則子
小 蝶 二瓶 敦子
ワ キ 上野 正義
立 衆 山内 幸雄

囃子 大 鼓 坂内 庄一
小 鼓 折笠 成美
太 鼓 長谷川士希子
笛 栗城 幸子

地謡 鈴木 圭介 鈴木 直寿
相田 幸三 中村 寿男
坂内 實 平林 光雄
斎藤 堅 皆川 米作

後見 堀 篤子 渡部 測行
松尾 幸生 木村 武晴
二瓶 晃



はじめの一步！
能「土蜘蛛」(小蝶)で初舞台！

二瓶 敦子

(ほんとにやれるだろうか?) これまでの稽古、先生の声、一緒に稽古してきた皆さんの顔も浮かんだ。涙が出そうな緊張感。いよいよこの舞台を踏む。『ヒー(ドキッ!)』幕が上がった。面(おもて)から見えた小さな世界、よし! と気合が入った。暗いホームからゆっくり動き出した夜行列車のように、一歩一歩、静かに動き出した。緊張感で震えた長い「橋掛かり」。足裏で板目を感じながらはこんだ。(ここだ!) 静かに左足をかけて、正面を向いた。(もう大丈夫!) 心をこめ

秋の演能

十月二十四日(土)

会津能楽堂

【狸々】

シ テ 堀 篤子
ワ キ 鈴木 圭介

囃子 大 鼓 船木 真一
小 鼓 折笠 成美



地謡 宇田 宣子 斎藤 令子
渡辺ヒロ子 佐藤ヨシカ
増井 典子 栗城 幸子
渡部 静子 古田 豊子

後見 平山 昇 坂内 庄一

太 鼓 一条 正夫
笛 石田 桂子

能「狸々」の笛を吹いて

石田 桂子

能の笛は、平成十四年「忠度」と平成十五年「竹生島」の笛を吹いて以来です。

山田先生から能「狸々」の笛をとお電話を頂いた時、正座して吹く事が出来るか心配でしたが短い曲だからと受ける事にしました。毎日笛のお稽古と一緒に正座、立ち上がれる様に、少しずつ時間を延ばしながら練習しました。申し合せでは何とか上手くなりました。

いよいよ本番、幕が開くと同時に名乗笛の音色が今一だと思ひながら吹く。ワキの待謡が終り狸々の出の「渡り拍子」が終りに近づいても姿が見えないので、見計らいは無しでと申し合わせたのにも拘らず、つい余計に吹き始めた時、狸々の姿が見え慌てて留を吹き誤摩化してしまいお相手下さった皆様にご迷惑をお掛けして申し訳御座いませんでした。笛の音が出難かったのでゆっくりと吹く所を速く吹いた為です。何度も稽古したのに、反省しています。

狸々が楽しそうに謡や笛に合わせて舞うのを其れと無く見ているうちに終り、心配していた正座、足の運びも見苦しいながらも橋掛かりを帰る事が出来ホッと、無事演技が終わった事に感謝しています。

グループ紹介(第二回)

五十五年の時を刻む

会津龍風会

栗城 幸子

会津龍風会は森田流笛の会です。昭和三十五年、故古川(穴澤)義夫氏の要請により、故寺井啓之先生が来若されて会が誕生、その時の会員数は五名であったということです。当初は上野駅から九時間もかけて、お出で下さり、お稽古二回で帰ろうとすると、「もう一回ですよ。」と引きとめられたこともあったとか。平成七年になると、啓之先生嫡孫寺井宏明先生が来若、ご指導いただきましたようになりました。「オウヒャー」という大きいお声にびっくり！

平成十七年には、東山温泉向滝会場に盛大な記念大会を、更に十年後の平成二十七年六月九日には、啓之師来若五十五周年・宏明師来若二十周年記念大会を『会津能楽堂』で開催することができました。ひとえに先生方、先輩方のお陰です。昨年の記念大会で夫人の先生方と素囃子をさせていただいた時の胸の高鳴り・感動は、今も時折よみがえり、大きな励みとなっております。

記念大会終了後会員が増え、新風吹く稽古場で、宏明先生の熱心なご指導の下、一同稽古に励んでおります。今後も先輩諸兄姉の信念を受け助け合い力を合わせ精進して参ります。



太鼓の会

佐藤ヨシカ

平成十九年、松本章先生が亡くなられてから宗家金春国和先生に師事、会員は森田ルリ子、一条正夫、佐藤ヨシカの三名で新潟の稽古場に通っている。しかし、平成二十七年金春先生が突然死去されたため現在、桜井均先生に師事、勿論、新潟へ月一度通っています。会津で太鼓の稽古をする人を、五、六名募り先生に会津において頂ければ大変理想です。現在、坂下の芳馨会の稽古の折に一条氏に来て頂き、太鼓のしめ方等も含め三名程の稽古を始め準備をすすめています。お陰様でお道具は数台ありますので是非お道具に触れてみるところから始めてみませんか？

会津ゆかりの能楽師逝く

上條 芳暉 先生

二十五年十二月死亡
葛野流 大鼓方
重要無形文化財能楽総合指定保持者
会津太鼓の会 主宰

水上 輝和 先生

二十六年十月死亡
宝生流 シテ方

重要無形文化財能楽総合指定保持者
みやび会 主宰

金春 國和 先生

二十六年十二月死亡
金春流 太鼓方
重要無形文化財能楽総合指定保持者
太鼓の会 主宰

能楽堂建設の立役者逝く

満田 政巨 氏

会津天寶グループ会長
二十八年一月八日死亡、八十六歳
満田氏は会津能楽堂建設協会の代表理事をつとめ、民間資金だけによる建設運動の先頭に立って、能楽堂を完成させた。

山田 和彦 氏

元会津能楽会会長 七十二歳
会津能楽堂建設協会の業務担当理事として、総務担当の故本田忠一氏と共に運動の両輪として活躍し、その功績は大きかった。



山内 幸雄

薪能に初出演して

九月二十三日、会津能楽堂では薪能公演準備に取り掛かっている。演題は「土蜘蛛」。
六月末、謡の師である佐藤ヨシカ先生より「立衆」の出演をすすめられ、夢の能舞台を一生に一度は引き受けました。が、仕舞の経験がない私には無理な話だったと後から後悔しました。

七月、申し合せがあり、上野先生より立衆は謡所が少ないがシテ、ワキと息の合った激しい絡み合や太刀回りがあると説明がありました。週二回の練習日を計画、姿勢、足の運び、動き、顔位置、角度、目線、腕の形など繰り返し指導を受けました。始めのうちは何を教えていただけでも身につかず、忘れる事が多く情けなく思いました。農作業の傍ら力セットに合せ謡所を、夜はビデオを見て舞を、会津能楽堂での打合練習日を経て本番を迎えました。
当日、能装束を身に着けると凛とした気分と緊張が高まり「大丈夫、冷静に対応していけば自分の演技が出来るはず」と一人呟き初舞台の一番を待ちました。

舞台に出た時、太鼓、鼓、笛、地謡が嵐のように聞え冷静さが無くなっていました。体は動かない、次の所作はと次々と問題が出てきました。中盤以降冷静さを取り戻し、演技する事が出来ました。

能「土蜘蛛」に感動

齋藤 堅

鏡の間から笛の音色が波のように高く低く流れると、観客の私語が吸いとられたように静かになった。私は切戸口から地謡座に並び終える。揚幕から囃子方が現れると、一段と張りつめた舞台となった。次に一畳台(土蜘蛛に欠かせない道具)が置かれ、舞台に役者が整い、舞台と観客の空間が融合された感覚になった。

笛の一声で能が進行。原因不明の熱病に冒された頼光には侍女の持ってきた典薬もきかない。ある夜あやしい僧形の者があらわれ「汝悩むのは我が仕業なり」といって多くの糸(巢)を繰り出す場面、前シテ、ワキ、小蝶、従者の謡、詞から性格をよく表現し、囃子と相合って蜘蛛の糸を投げるタイミングが効果的であった。

早鼓の囃子の調べを受けて独武者(ワキ)が登場。頼光の話聞き血痕を辿り塚をつきとめる。千條の糸を繰りためては投げ、繰りためては投げかけるが、大勢にとりかこまれ、土蜘蛛が退治される場面は圧巻だった。囃子の調子と役それぞれ立ち振舞い、それに地謡の息がぴったり合い、すばらしい演出が繰り広げられた。

特にシテが蜘蛛の糸を前半で一回、後半で四回投げたが、すべて成功、シテさんの苦勞があったと察します。

能楽との出会い

馬場 則子

私と能楽の出会いは高校入学直後、同級生の友達に誘われて能楽部(今はもうありませんが)に何となく入部した時です。当時は能楽部員も十人くらいおり、そこに佐藤ヨシカ先生が教えるに来て下さっていました。部員みんなで東京の水道橋に能楽堂見学に連れて行って頂いた時は、その雰囲気にもみな感激しました。

高校卒業後は何(十)年も能楽とは離れていました。また始めたい!!という気持ちになったのは、ヨシカ先生が当時から、私達生徒にも真つすぐな情熱を込めて教えて下さっていたからだと思えます。そして今は仕舞の他に、小鼓も勉強させて頂いています。昨年は舞囃子「狸々」で初舞台をさせて頂きました。かなりの緊張で頭の中が時々白くなり、お囃子の他の方々にご迷惑をおかけしながら何とか無事終わり、ほっとしました。小鼓は難しいですが、一曲一曲と覚えていく事や、お囃子で他の方々と合わせて演奏する事など楽しいと感じます。これからもう少しでも上達する様に仕舞も小鼓も地道に練習していきたいと思えます。よろしくお願いたします。



能「羽衣」の笛を担当して

野崎 邦子

能の笛は何時も山田先生を頼り切っておりましたが、先生にご都合あられてお受けしましたものの、器量不足で不安が一杯でした。

迦陵頻伽の美しい声かすかに渡る極楽世界ながら展開される羽衣の曲、これを笛で妨げてしまつては皆様にご迷惑な事です。こんな思いでへこんでおりました折、平山先生からの「毎日一時間の稽古」と助言が有り実行しました。かなりの成果、有難うございました。懸命に練習したにも拘らず当日は始めの出の幕でお可笑な笛を吹いてしまいました。反省頻りです。すみませんでした。

能のひびき

最後の留高音は晴ればれと澄んだやわらかい音が出ました。真に笛と気持ちのもち様のかかりが良く分り、繰り返す稽古する事の大切さが身にしみました。皆様有難う御座いました。故寺井啓之先生の會調の時の心得「謡の邪魔にならない様に木の葉を散らさない様にそよそよとそよぐ様に吹くのです」と稽古の合間にお話して下さりました。

根ざし行く育成委員会活動

一 能教室等の実施状況

1 二十六年

小学校（※印は能楽堂で実施）
 赤城小学校（郡山） 日新小学校 荒館小学校
 東山小学校 安積三小学校（郡山）
 ※新鶴小学校 城西小学校 城南小学校
 大戸小学校 ※神指小学校 行仁小学校
 松長小学校 永和小学校
 赤城小学校、日新小学校は学習発表会で謡・仕舞を披露した。両校とも謡いは児童全員無本で見事に謡い、好評であった。また、日新小学校では朝日小学生新聞主催「第二回学校・地元・家族自慢プレゼントコンテスト」に応募、会津の能についてのプレゼントをし「七五二」作品中全国二位の快挙、「NEC賞」を受賞した。

教師対象講座

小学校音楽教員対象（喜多方二小）
 中学校音楽教員対象（能楽堂）
 湊公民館能教室

講座内容（受講者三十五人）

①能とは ②実演観賞（謡・仕舞・連管・連調舞囃子） ③体験（すり足・謡）

能体験講座（公益財団法人会津若松文化振興財団主催 会津若松市教育委員会共催）

受講者 社会二十六人

講座内容

①能の歴史や用語 ②体験（能の所作・発声）
 ③模範演技観賞（仕舞鶴亀・連調山姥・連管舞働） ④舞囃子「羽衣」キリ

2 二十七年

小学校（※印は能楽堂で実施）
 ※日新小学校 河東学園小学校
 ※東山小学校 ※謹教小学校
 ※鶴城小学校 城西小学校 ※城南小学校
 ※永和小学校 ※神指小学校 松長小学校
 行仁小学校 荒館小学校
 能体験講座
 二十六年の実施状況とほぼ同一内容
 会津若松市行事への参加（例年通り参加）

① 「伝統文化であそぼう」（例年通り参加）

二十七年度は例年の行事に加えこの行事を發展させた「日本文化に親しもう」を開催。能楽会では謡・仕舞の体験に重点を置いた行事に改編して実施

② 「能であそぼう」会津子どもまつり（市教育委員会教育総務課あいづっこ育成推進室所管）



二 育成会の講座協力会員

（二十六年・二十七年）

山田和彦、佐藤ヨシカ、折笠成美、平山昇、上野正義、一条正夫、栗城幸子、鈴木圭介、坂内庄一、堀篤子、石田桂子、宇田宣子、長谷川桂子、松井恒子、森田ルリ子、山垣美枝子、渡辺ヒロ子（通常十人前後で実施 また、囃子の都合等で急遽お願いした方を含む）



三 能教室・講座受講者の感想文

1 児童の感想文抜粋（出来るだけ原文通りとしたが一部校正した）

事前指導 ① 私はDVDを見るまで能というものがどんなものか分かりませんでした。でもDVDをみて興味をもちました。

歴史 ① 約六五〇年前に始まった能が今でも受け継がれていることはすばらしいことなんだと、今日の講座で実感しました。② 「会津が能楽で有名」だったことにおどろきました。このような文化はずっと残ってほしいことだと改めて思いました。

太鼓 ① 太鼓や笛の音色を聞いてきれいでした。太鼓は一つ一つ同じ音のたかさかなあと思っていたけど音を聞いてまったくちがう音でした。こんなにすごい文化があるなんて驚きました。

太鼓 ① 私は大つづみの楽器をたいてて手が痛くなつたけどリズムを覚えたり声を出すことがとても楽しかったです。

小鼓 一番楽しかったのは楽器の体験です。小鼓は肩の上のせて演奏するのは初めてだったけどみんなと「さくら」を演奏して楽しかったです。

笛 笛はピンでおとをだすことが出来るけどいざ笛を吹くと全然おとをだすことが出来ませんでした。連調 男の人三人の歌がとっても

きれいな声でびっくりしました。太鼓と歌のリズムもあっていました。

舞囃子 ① 力強い声とその場の雰囲気を引き立てている楽器や舞は、やってみると難しく何回も練習しないと上手に出来ないと感じました。能をするには練習をたくさんしているんだと改めて感じました。② すごいと思つたことは歩き方、掛け声のタイミングなどを意識して舞台の上で演じるといことです。能を見ているときすごいなと思つていました。

面 ① お面はただつけて顔を変えただけのものだと思つたが、面をつけるのに十分時間をかけその役になりきって中身も変えてしまうすごいものだと思います。

謡 ① 能をうたうときはせすじをぴんとのばしてうたうと気持ちすすきりしてうたえることがわかりました。

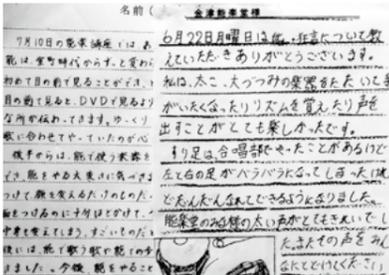


仕舞 ① ぼくは心情の表し方に力を感じました。心情を言葉として表さなくても、体の動きで表すことが出来ることに面白みを感じました。② 能のよさこびやかなしみ方は表情ではなく体の動きで表されることになりました。

全体 ① 文化は学ぶだけでなく実際に体験すると理解が深まることを知りました。② 日本の室町時代から受けつがれている文化ということだけわかつていて少し興味はありました。実際に見たり、触れてみたり教えてもらいながら「能」について少しずつわかっていくのが楽しくて、すぐ夢中になりました。③ シテ、ワキやいろいろな人達がいなくて伝統芸能はなりたないと思いません。いろいろな苦労を重ねながら素晴らしい能ができるんだなあと実感しました。④ 私は能楽を初めて体験しました。私がやってみて感じた

ことは、「心が一つでない」と完成しないです。私にとって心一つは永遠のテーマです。それをこなしているのを見てびっくりしました。

文化振興財団主催能講座受講生の感想
 ① 様々な体験が出来てとてもたのしかったです。楽器・すり足（二十代）
 ② 二度目の体験で能の基本的な内容を理解することが出来ました。（七十代）
 ③ ぜひこのような体験の伴った「能」の魅力を広める活動を続けて下さい。④ 能はお相撲と同じで「日本的」な事柄ですからこれからも活発な活動をお願いします。（六十代）



3 まとめ

以上の感想から小学生の感性の鋭さに感心させられた。また、一般の方々の感想文から改めて講座の意義を認識した。



役員名簿

平成二十六年二月現在

会長	佐藤 ヨシカ
副会長	湯田 眞佐弘
理事	折笠 成美 (事務局長)
〃	平山 昇
〃	玉川 おくに (庶務)
〃	上野 正義 (庶務)
〃	栗城 幸子 (会計)
〃	坂内 庄一 (会計)
〃	鈴木 圭介
〃	一条 正夫
〃	小野木 和子
〃	角田 久美子
監事	渡部 妙子
〃	河合 政弘

平成二十七年二月現在

会長	佐藤 ヨシカ
副会長	湯田 眞佐弘
理事	折笠 成美
〃	平山 昇
〃	上野 正義 (事務局長)
〃	玉川 おくに (庶務)
〃	栗城 幸子 (会計)
〃	坂内 庄一 (会計)
〃	鈴木 圭介
〃	一条 正夫
〃	小野木 和子
〃	角田 久美子
監事	渡部 妙子
〃	河合 政弘

◎委員会構成 (代表者)

- 演能企画委員会 折笠 成美
- 財産管理委員会 一条 正夫
- 能装束着付部 小野木和子
- 広報委員会 湯田眞佐弘
- 会報編集委員会 鈴木 圭介
- ホームページ作成委員会 鈴木 圭介
- 育成委員会 平山 昇

「その他」の情報

▼能楽会員の状況

平成二十六年一月 九十名
平成二十八年一月 八十九名

入会者

- 佐藤 文江 山内 幸雄
- 二瓶 敦子 猪俣 隆二
- 馬場 則子 松井 恒子
- 小向 哲雄 長谷川土希子

退会者

- 志波 幸世 丸山美伊子
- 大塚 利衛 星 茂登美
- 角田 恒雄 木村 玲子

物故者

- 星 昭 宇津味守夫
- 山田 和彦

▼寄付金

会員の長谷川信雄様より、能装束購入基金として金十萬円の寄付を頂いております。

▼購入品

平成二十六年
かがり火台 (電飾) 二台

▼会津能楽囃子会の動き

- ▽第二十五回会津能楽会囃子会
平成二十六年三月九日 (日)
会場 萬花楼 午後一時始
- 内容 舞囃子 養老他十曲
連調小鼓 駒之段 連管 鞆鼓
- ▽第二十六回会津能楽囃子会
平成二十七年三月八日 (日)
会場 萬花楼 午前十時始
- 内容 舞囃子 養老他十三曲
連調大小 熊野 連管 中之舞
独鼓太鼓 葛城

編集後記

○例年になく降雪の少ない冬となりました。

○秋の演能会時、編集長から初出演の人への執筆依頼を予告しておいたせいか、原稿の集まり方が大変好調で、第二回の編集会議のときには九割かた集っており編集作業が速やかに進められました。ご執筆いただきました皆様へ改めて感謝申し上げます。

○今年の会報の特色としては、随想に力点がおかれました。演者としての想い、観能者としての想いを寄せていただきました。

○中でも、西会津町国際交流員として平成二十一年に在日されていたニサ・シャノンさんの「私と能文化」は、日本の文化に対する憧れと興味、殊に「能」に対しての深い理解と感動が素直に綴られてあり、私たち日本人でも及ばないところまで感受され、考えさせられました。

○従って、今号は文章が多いために写真が小さく少なめになりました。ご理解ください。

○最終校正の段階で、山田和彦氏、満田政巨氏の訃報が入って来ました。衷心より哀悼の意を表します。○最後に会員の皆様のご精進とご健勝を祈念して欄筆といたします。

- 鈴木 圭介 石田 桂子
- 上野 正義 増井 典子
- 佐藤 仁